

\* Collector. P. A. (Present Author); T. Ai. (Tadao Aihara); T. Am. (Tetsuo Amano); K. H. (Katsumi Hayashi); Y. H. (Yoshiwo Horikawa); I. I. (Itsuhiko Ito); S. I. (Satoru Inoue); S. J. (Shigeichi Jinno); H. Ka. (Haruyuki Kamemoto); S. Kk. (Shunji Kako); S. Kt. (Shigeichi Katayama); H. Ki. (Hitoshi Kimura); M. Ko. (Mitsusaburo Kotani); Y. K. (Yonetoshi Kubo); M. Km. (Masamori Kumashiro); M. Kr. (Masataka Kurabayashi); H. M. (Hideo Masui); J. M. (Junichi Matsuse); T. M. (Taneyasu Maki); M. N. (Masanori Nagano); K. Na. (Kenichi Nakatani); K. Ne. (Kunito Nehira); F. O. (Fusako Ohashi); I. O. (Ichirobei Ota); T. S. (Taro Seki); K. S. (Kichigoro Suzuki); A. T. (Akiyoshi Tsugo); S. Ts. (Sasamori Takeshita); S. Tg. (Sakuichi Takagi); Y. Ts. (Yoshio Takahashi); Y. U. (Yohachi Uesugi); H. Y. (Hiroyuki Yamamoto); T. Y. (Tohei Yamamoto); N. Y. (Norimichi Yano).

\*\* Previous report.

\*\*\* Literature number.

### ○台湾のキツネノマゴ属について (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: Notes on *Justicia* in Formosa

台湾植物の調査ははなはだ不十分で、訂正しなければならないことが多い。キツネノマゴ科植物も例外でない。例えば台湾で *Rungia parviflora* Nees とされている植物は、本来の *R. parviflora* とは似ても似つかないものであるし、*Strobilanthes* (イセハナジ属) は研究不足と学名のあてちがいで、めちゃくちゃに混乱している。これらを正すためには現地での調査をしなければならないが、標本だけからでもわかる範囲のことは訂正しておきたいと思う。ここではキツネノマゴ属だけについてのべる。

正宗氏の台湾植物目録 (1954) には次の4種類5変種がのせられている。

*Justicia gendarussa* Burm. f.

*J. hayatai* Yamamoto (var. *ciliata* Yamamoto, var. *decumbens* Yamamoto)

*J. procumbens* L. (var. *hirsuta* Yamamoto, var. *linearifolia* Yamamoto, var. *riukiensis* Yamamoto)

*J. quadrifaria* Wall.

このうち *J. hayatai* は台湾特産であるが、あとの3種は熱帯、温帯に広く分布しているものである。

*J. gendarussa* は熱帯地方に広く栽培され、ときに逃げ出して野生化しているもので、台湾でも野生化して広くみられるようであるが、もともとの野生がどうかは疑問である。

*J. hayatai* はキツネノマゴに近いが、包葉が狭卵形で広い点で容易に区別される。澎湖島、恒春半島に分布するが、これはインドからインドシナ、海南島などに広く分布する *J. diffusa* Willd. に近い。ただ後者は包葉ががく片よりずっと短いのに、台湾のものは包葉が大きくて、がく片とほぼ同長なのが異なる。台湾から2変種が書かれている

が区別する必要はない。

琉球・台湾のキツネノマゴはかつてインド東北部に分布する *J. simplex* にあて、*J. procumbens* から区別されたことがある。*J. procumbens* は包葉が広線形で長さ約 6mm 前後あるが、*J. simplex* は包葉は狭ひ針形でやや幅が広くて短く、長さ約 5mm で、果実も前者がやや大きいちがいがある。しかし Hemsley は両者の区別は困難だとかいている。台湾、琉球のものはどちらかというといふと *J. simplex* に近いけれど、この差異は微妙で同一種類の地理的変異とみた方が適当と思う。*J. simplex* 型とみられるのはインド東北部と琉球、台湾にみられ、中間のインドシナ、華南では *J. procumbens* 型である。インド東北部のものは葉が大きく、茎に長い立毛をもつ傾向があるが、琉球、台湾のものは葉が小さく、多くは茎の毛は下に曲った短毛であるのでややことなる。地理的にもはなれているので、一応別の変種として区別しておくが、これらの差ははっきりしたものでなく、琉球と本州のものをくらべても中間形があつて区別は不可能なくらいである。ただ上記の葉の形、包葉の形、果実の大きさなどでやや異なる傾向があるといつた程度である。琉球のものは花がやや白色がかかっているのではないとも思われる。

キツネノマゴによく似ていて、茎に殆んで毛がなく、包葉やがく片は線形で小さく先端に短毛がわずかあるほか無毛のものが、台湾にかなり広く分布している。葉が小さい点はキツネノマゴより *J. diffusa* に似ているが包葉や毛のはえかたは全くことなる。これはインド、インドシナ、華南に広く分布する *J. prostrata* に一致する。

台湾から報告された *J. procumbens* L. var. *linearifolia* Yamamoto は *J. prostrata* に近いもので毛のはえかたや包葉、がく片の形は一致する。しかし花序の長いこと、葉が線形である点ことなる。これはインド、インドシナに分布する *J. quinqueangularis* Koen に一致する。これはしばしば *J. prostrata* と同一種としてあつかわれることもあるので、そのへんのことは今後研究されねばならないし、*J. diffusa* Willd. var. *vahlüi* Clarke との関係もしらべられなければならない。

*J. quadrifaria* wall. はインド、マレー、インドシナ、華南、華中に広く分布しているが、台湾では、タロコ附近から知られるだけで分布はかぎられているようである。以上のことから台湾のキツネノマゴ属は次のような 6 種類が知られることになる。

(東京大学理学部植物学教室)

1) **Justicia gendarussa** Burm. f. Fl. Ind. p. 10 (1761)—*Justicia gendarussa* L. f. Suppl. p. 85 (1781); Henry, List. Pl. Formos. p. 69 (1896).

Hab. Formosa, Kelung, Taipei, Tansui, Kaoshung.

2) **Justicia hayatai** Yamamoto, Suppl. Ic. Pl. Formos. 2: 43 t. 21-23 (1926) cum var. *ciliata* et var. *decumbente*.

Hab. Peng-hu-tao, Garanbi, Kan-kou.

3) **Justicia procumbens** L. var. **riukiensis** Yamamoto, Suppl. Ic. Pl.

Formos. **2**: 31 t. 17 et 18 (1926); Hara, Enum. Pl. Sperm. Jap. **1**: 295 (1948)—*Justicia simplex* D. Don sensu Clarke in Hooker Fl. Brit. Ind. **4**: 539 (1884) sp. ex Loochoo Isl., Hemsley in Journ. Linn. Soc. Bot. **24**: 247 (1890) pro parte, Makino in Bot. Mag. Tokyo **9**: (282) (1895)—*Justicia procumbens* L. var. *hirsuta* Yamamoto l.c. p. 32 t. 19 (1926).

Distr. Ryukyu et Formosa.

4) **Justicia prostrata** (Roxb.) Gamble, Fl. Madras **2**: 759 (1918)—*Justicia diffusa* Willd. var. *prostrata* Roxb. ex Clarke in Hooker Fl. Brit. Ind. **4**: 538 (1884); Hemsley in Journ. Linn. Soc. Bot. **26**: 245 (1890).

Hab. Garanbi (Y. Yamamoto, Aug. 25, 1925), Mt. Tcrass (B. Hayata, Jun. 5, 1912), Mt. Yü-shan (Kawakami et Mori, Nov. 17, 1906), Taroko-Batagan (B. Hayata, Apr. 27, 1917).

5) **Justicia quinqueangularis** Koen ex Roxb. Fl. Ind. ed. Carey et Wall. **1**: 134 (1820), Clarke in Hooker Fl. Brit. Ind. **4**: 536 (1884), R. Benoist in Lecomte, Fl. Indo-Chine **4**: 732 (1935)—*Justicia procumbens* L. var. *linearifolia* Yamamoto, Supp. Ic. Pl. Formos. **2**: 33 (1926).

Hab. Formosa, Kuraru (E. Matuda, Aug. 1915, no. 452).

6) **Justicia quadrifaria** Wall. ex T. Anders in Journ. Linn. Soc. Bot. **9**: 514 (1867), Clarke in Hooker, Fl. Brit. Ind. **4**: 530 (1884), Hemsley in Journ. Linn. Soc. Bot. **24**: 246 (1890); Hosokawa in Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa **23**: 96 (1933).

Hab. Formosa, Nai Taroko (E. Matsuda, Aug. 8, 1918 no. T. 539).

□貝塚爽平：東京の自然史 pp. 186, 紀伊国屋新書 C-8 (1964) 直接は植物学の本ではない。しかし植物の棲家が地面で、地面の歴史が関連を持つとなると素通りにはできない。というのは近年洪積世を中心とする地史への地質学の共同研究はめざましい進展をとげている。しかし、それをまとめて地質学以外の者に判らせるようにしたものは残念ながら皆無で、これには私などほとんど閉口した経験がある。この本はそれをカバーしてくれたものとして推賞できる。東京の地史ではあっても、洪積世の編年は関東が主であるし、またユースタティックな変化はほぼ全国に適用しうるといふ点でも、決して東京都民だけの手引書ではない。植物地理に関心のある向きに奨めたい。(前川文夫)